

地域コミュニティ

たかさき
毎日

2016年 1月号

発行所(編集室) 毎日新聞高崎
〒370-0042高崎市貝沢町856
発行人 金井美次 / 印刷 毎日新聞
毎日新聞の姉妹紙で

深むし茶でまろやか

茶のし
水本屋

前橋中央通り ☎027(231)20



かなった夢 みんな

東部小の金管バンドは昨年
全国大会でも大活躍でした。
た6年生たちが口にするのは、
感動・友情・絆……。

MAINICHI
新毎日

購読のお申し込みは、

高崎中央 ☎322-5249 高崎東部 ☎323-3333
高崎南部 ☎322-4079 高崎双葉 ☎323-3333
高崎北部 ☎361-0755 高崎大類 ☎323-3333
高崎倉賀野 ☎346-2331 高崎中居 ☎323-3333
高崎真郷 ☎323-3333

広告のお申し込みは 群馬毎日広告社 ☎323-3333



オペラと日本歌曲を追い求める旅
その先に見えるものって

ながい みか 永井 美加さん

ソプラノ歌手

国立音大卒業。イタリアでフランコ・リッチャルディ氏、レオナルド・カタラノット氏に師事。日本歌曲を塚田佳男氏に師事。数々のステージに立つ。群馬オペラ協会会員。高崎市出身・在住。

た。ふたりの先生が歌手への道を開いてくれたんです。

以来、様々なステージに立ち、日本歌曲にも積極的に取り組む。日本人の機微が伝わるのは、やはり日本の歌だから。

「感情をこめ過ぎるくらいに歌ったつもりが塚田先生から『もつとやれ』のお叱り。『落葉松(からまつ)』『平城山(ならやま)』……、『日本歌曲の方がオペラより情念がこもっていて、激しく濃い』のだから」と。衝撃的な言葉でした。

17世紀はじめ、イタリアでオペラが、日本で歌舞伎が生まれた。華やかさ、激しさ、情念……、あまりにも共通するふたつの音楽文化の誕生は偶然ではないのでは。だからオペラと日本歌曲の探求を自らに課す。

「声には色があるといひます。ならば私色の歌声は何色なのか。それを追ひ求める旅が人生。『全身全霊をかけて歌う』私と、聞いてくださる方との『感情の共有』を繰り返しながら」

私色の歌声って何色

自分の人生を高めてくれた出会いがいかに多かったか。つくづく感じる。世界三大テノールのブラシド・ドミンゴが歌う姿、師事したフランコ・リッチャルディ氏、ベッリーニ大歌劇場常任指揮者のレオナルド・カタラノット氏、日本歌曲の塚田佳男氏ら。元々はピアノニストを目指して音大に学んだ自分が、ソプラノ歌手となった今、改めて振り返ると。

「大学に入る前でした。『オテロ』(ヴェルディ作曲)を歌うドミンゴの姿を見て、『歌の道で生きてゆきたい』と直感しました」

音大入学後、父親が病に倒れた。看病と大学生活、そして卒業。ピアノはそばにあったても「歌手」とは無縁の日常。しかし20代後半になっても

「2000年に思い切つてイタリア・ミラノに短期留学。そこで出会ったリッチャルディ先生の指導が人生の分岐点に。2006年にはシチリアに飛び、カタラノット先生に出会う幸運を手に入れました。先生に自分が気づいていなかった『声の幅の広さ』を見つけていただき、『本能で歌え』とアドバイスを受けまし

「ひとつことに長い年月打ち込めば、言葉が失うことが。群馬が誇る冬の名物『下仁田葱(ねぎ)』。極太の葱をつくり続けて半世紀で、昨年5月に満80歳になった瀬間さんとさんからいただいた『傘寿の葱』を料理しました。甘さと柔らかさ。そのものは半世紀の年輪からかさは半世紀の年輪そのもの。トラクターで畑に出る瀬間さんの笑い顔が美しい。60年前に大学山岳部員としてヒマラヤに挑み、40年前にはエベレストが見える標高約3900Mの丘にエベレストビューホテルを建設した長野県出身の宮原颯(たかし)さん。『ヒマラヤ観光でネパールを飛躍させたい』とネパールに帰化。同国西部のアンナプルナ連峰を望む丘に新ホテルを建設中。『80代でホテルを建ててどうするの?』決まっています。90歳まで必死に楽しく働きたい。建設現場で見せる笑顔は、あまりにもまぶしい。▲高齢社会を『困った』と考える前に『知識経験を重ねた人材の宝庫』ととらえよ。ふたりの80代は、そう教えてくれています。

たかさきの窓